

東北商工時報

毎月三回一日十日廿日發行
 編輯兼發行 高木良衛
 印刷所 東北商工時報社
 發行所 昭和活版所
 印刷所 昭和活版所
 廣告料 一行金五十錢
 一部金五錢 一月十錢
 一ヶ月郵税共一圓廿錢

祝水郡南線開通式

昭和七年晚秋十一月十一日吉辰を卜し茲に盛大なる水郡南線棚倉間開通の大盛典を舉行せらるゝに當り本社は棚倉町民並近津村民と共に滿腔の祝意を表す

由來棚倉町は東白川郡の咽喉をなし四圍の山岳重疊として眺望佳なるものあり

土地肥沃なるを以て農桑を業とするもの多く商業亦盛んにして管むもの其の半を過ぐ 煙草、米麥、繭、生糸、馬、酒、醬油等の産物を主とし八溝山系を中心として産出さる。木炭木材等の集散地たり

爾來交通は白河町を終点とする白棚鐵道によるもの多く道路平坦にして自動車の發着頻繁を極め交通至便なり 此の時水郡南線棚倉間の鐵道工事も一年有余の日 二十六萬圓の經費を費してその完成を見るに至つたは町將來發展の狀様瞭然として眼前措顯するの感あり本紙は衷心より棚倉町民の献身的努力に敬意を表すると共に將來の發展を祈りて今日の祝辭と成す

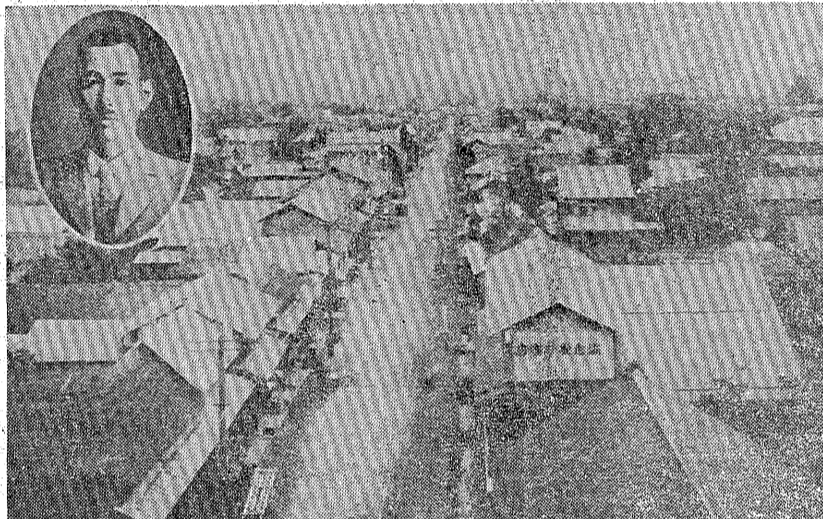
昭和七年十二月十一日

東北商工時報社

名勝舊蹟に富む 棚倉町

棚倉町は往時古伊野の種倉と稱せし地にして寛永二年

一名近津城と稱し星霜二百五十年代々棚倉藩主の居城たり 戊辰の變革に逢ひ爐土と化し春風秋雨六十年追手搦手の諸門既に空しく只内濠水を湛へ牙城の跡を在す又町の北に赤館城跡あり入皇第百代後小松天皇の應永年間築しきものなりと 後赤館源四郎比々に據り寛永四年棚倉城成るに及び廢城となりし處なり

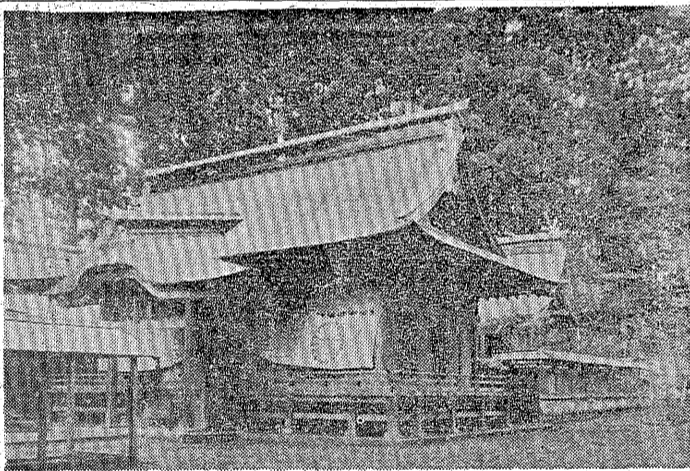


◇—長町田宗及景全町倉棚—◇

丹羽長重棚倉城を築造以來次第に繁榮を見るに至つた今日町の中央に存する龜ヶ城跡は實に丹羽氏の築けるものにして今尚ほ當時の礎を殘し壁と松樹其の他の樹木四季共々に美觀を呈す

赤館城跡の南麓を舊稱根子屋と云ひ寛永六年大徳寺僧玉室 故あつて澤庵と共に罪を得 此の地に流され居ること九年小庵を結び 跌

座して三昧に入り 足を門外に出ざりし 十四年赦に逢うて歸る 是れ先盧名盛氏赤館を領するに先祖が頼朝より受けし處の觀世音を安置し根子屋觀世音と云ひしと云く堂宇は戊辰の役兵火に逢ひその後堀



川山觀音寺に合す 玉室流禪の頃領主内藤信照菩提所光徳寺を觀音堂側に建立し和かに玉室の露餐を賑はし自ら其の徳を汲みしと云ふ町の西北に小丸山と云ふあり 圓頂にして山脚のび さながら陵墓の形をなし嶺上三箇の墳をなし中央白河國造の魂を鎮むと云く又文治五年 義經の臣鈴木三郎主の蔭を踏みて來り 病みて花園に泊り胎す處の佛像を祭りしが今に花園權現として殘る

棚倉町馬場神社に通ずる路傍に一基の地藏尊あり 鹽伊乃巳直の冥福を祈りしものにて伊能地藏尊と云ひ元根子屋にありたるものと云ふ 國幣中社郡々古別神社は棚倉町字馬場及近津村大字八槻の兩所に鎮座し兩社其境内に老杉翁鬱として神威壯嚴自ら襟を正さしむるものあり

祝水郡南線開通式

御祭神は味味高彦根命日本武尊にして景行天皇の相に創建せられ 中頃兩部習合のため近津大明神と稱せられしが明治六年社號を復舊せられ國幣中社に列せられたるものなり

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|--------------|------|------|------------|-------------|---------------|-----------------|-------------------|--------------|------------------------|------|------|------|--------|------|--------|------|-------|------|
| 國幣中社 花園礦泉 棚倉町花園 | 料理店 權現湯 橫倉泰治 | 高橋成信 | 仁平哲雄 | 牧野吳服店 牧野清吉 | 鈴木秀助 石川郡石川町 | 久保木美之助 石川郡石川町 | 田村郡小野新町 町長 小泉音七 | 丸一運送 株式會社 土木建築請負業 | 江口伊六 東白川郡常豐村 | 佐川義房 土木建築請負業 東白川郡豊里村大洪 | | | | | | | | | |
| 岩路軍次郎 | 佐藤治三郎 | 上田源八 | 坪井榮作 | 柳澤剛藏 | 藤田彦次郎 | 古川清左衛門 | 星 勇 | 須賀兼嗣 | 津野喜七 | 内海榮次郎 | 磐田國藏 | 和田松衛 | 渡邊惣吉 | 金澤惣右衛門 | 石田 貢 | 鎌田直右衛門 | 佐藤安八 | 鈴木孫之進 | 名木雄次 |

當選御禮

郡山市會議員

中道を歩む

井上光男氏

氏は郵便局長として多忙なる公職を持つ身にも、わらわす町のため常に東奔西走献身的努力を惜まざる清

何事によらず表面に浮動し來らず獨個の道を辿りつ、政界の種々相や明暗に飛躍策動しつゝある現實に對し超然として微笑するものであらう。

次は縣會議員か

石澤寛一氏

柵倉町消防組頭として幾多の消防事業のため献身的努力を盡くされ又現に町會議員として町治の職にある氏は政界に於ける新人として大衆待望の焦点に立つ

警察署長としての

菅野治郎氏

去る八月南會津郡田島より柵倉警察署長として着任

以來日尚ほ淺きにもかゝわらず一般郡民より慈父の如く仰がる、は之れ皆氏の徳の致す處にして資性温厚巨

根岸元吉氏

面接して應對の場合感じの良し事は其の人々に最も好感と結び付ける一印象と

縣立農蠶學校長として赴任以來教諭間の人望もあり一般學生父兄の信用も頗る厚

土地で生れた

柵倉小唄

一、實る稻穂に 群れ飛ぶ雀 秋が手まねく 五萬石

- 二、心赤館もえ立つ 鹿の子 委とりく 紅つゝじ 三、ぬれてやさしい あのはとゝぎす 緑色ます 愛宕山 四、願叶ふて 都々古の神に 様とつれだつ 禮参り 五、照る日曇る日 一筋町を ちつと宇迦様 見ておわす 六、光るしぶきに 小姑が躍る

亂れ及の影

- 久慈の川瀬に さえる月 七、花が散りこむ お城の堀に 音じめさびしく 灯がゆれる 八、霧がもつる、 八みぞの嶺に けふも揚荷の 駒が行く 九、煙る米山 藥師の森も 浮いて繪になる 春かすみ 十、戀の花園 情けに明けて 小唄とけ行く 湯の香り

切那！ 降り下された一 刀は情夫をかばつたお節の 小鬚をかすめて 返り血は さつと引きつゝ、た慎之助の 面に散つた。狂つた腕の口 惜しさに彼はさながら阿修 羅の如く亂刀を打ち振はせ

戻した 観念したお節の心理は逆轉 して矢鱈無生に反抗の手を 向け始めた。そのうちには 情夫を殺された敵愾心のこ もつて居たことは否まれな

りした柔かい舌とげのある 感觸を烙印して行つた同時 に彼の妙な心理も或る情慾 と變つて益々延びて行つた

に 乱熟した女の血の恨め しのげに凝りついた及を見 たとき 慎之助の心は淋し かつた。さつきの激怒に逆 比した悲痛を感じ出した彼

且つては自分の腰部に烙さ つくやうな快感を與へた それはある隅の方に及向ふ 術もなく女を捨て、衷心し た虚弱な吉三郎にも與へた

- 矢内清治 西白川郡白河町 土木建築請負業 道場小路 小野亀次郎 南町 中村新太郎 道場小路 兼子孫作 全 久我長吉 愛宕町 鈴木木長吉 七番町 鈴木木長吉 石城郡好間村 萩原礦業部 礦主 萩原申八 小田隅田川炭礦 礦主 小田吉次 所長 輪違忠雄

祝水郡南線開通

衆議院議員 小島智善
縣會議員 深谷新之助
全 三田暉次
全 大越軍三
全 鈴木英亮

棚倉町虛心會

營林署長 赤塚虎三
農會技師 遠藤守直
農蠶學校教諭 五十嵐博
郵便局長 井上光一
町會議員 石澤寛
消防組頭 菅野治
警察署長 片野麟一
農蠶學校教諭 加藤忠壽
小學校長 根岸元吉
農蠶學校長 岡山定穂
土木監督所長 大西重俊
宮司 大田利磨
町長 宇田平藏
近澤村長 角部爲松
社司

西白川郡白河町

白棚鐵道株式會社

社長 內藤六三郎

棚倉町 助役 大谷晋
收入役 田中俊次

棚倉町會議員

關川鶴吉
高萩松吉
宗田利八
生方文右衛門
鈴木兼三郎
大竹寅之助
和田善次郎
鈴木利作
駒場庄之助
石井友三

東白川郡近澤村

助役 下重宇右衛門
收入役 武地義三

東白川郡近澤村

八幡良三

小學校長

新井勝平

棚倉町

近藤芳策

棚倉町

常磐自動車會商

◆塙東館方面

東白川郡近澤村寺山
酒 銘 東駒 古市酒造店

棚倉町醫師團

上村壽誠
我妻源五郎
和田良造
鈴木芳貫

棚倉町

龜文館

新鶴

二葉

榮家

喜多川

棚倉町古町

上田材木店

香油煉油製造卸

高田油店

棚倉町新町

大木俊平

全

柳屋吳服店

電話三五番

磐城石井驛長
市毛祐宗
磐城端驛長
塚本彦衛門
東館驛長
須田正之助

石川郡母畑村
母畑温泉
八幡屋旅館
渡邊儀英

良品廉賣に勝る商略なし
〔磐城セメント〕特約代理店

和洋銅鐵
金物問屋
久釜屋商店

磐城平町五丁目
電話九番九番
東京振替貯金口座一〇九五六番

薄利多賣ノ親玉

いとろ家具店

家具製造 月賦販賣仕り候
簞笥雜貨

石城郡平町新川町通り

片官製糸紡績株式會社

岩代製糸所

所長 金井

郡山市大町

株式會社 丸伊吳服店

社長 今泉得三

常磐スポーツ界に 躍進する「新與」

萩原陸上競技部

石城郡好間村

萩原申八氏を礦主とする石城郡好間村萩原礦業部に陸上競技部の生れたるは去る四月にして、以來半歳日尙ほ淺きにもかゝらず、礦主萩原氏を始め山野邊部長の支援とスポーツに深き理解をもつ一般従業員の後援によつて部員のためゆきな練習は回を追ふて技の上達を見、記録の更新又更新その躍進振りの目覚ましきは他に比を見ざる有様である。

世は今やスポーツ萬能時代なりと云へども他炭礦の如き選手の手奪もなく、業務とスポーツの見解を明らかにして規約を厳にし、弊害除去のため青年團員に非ざれば部員としての入部を許せず健康増進を目的とするかたわら常に青年團としての職務を遂行以つて思想の善導を計り、智、徳、徳の併進を念願とする處は礦主の主唱する一山家族主義と共に社會に對しての誇りとする處である。

創立 昭和七年四月
競技部長 山野邊 覺
理事 石井正之助
外社員一同

監督	松田 純一
主將	吉江 孝慈
部長	大橋 毅
部員約四十名	
現在活躍しつゝある選手	
百米	中島 淺義
二百米	内海 四郎
四百米	松本 國夫
八百米	高橋 正夫
全	鬼澤 勝義
全	秋本喜代吉
全	佐藤 豊
全	園部 正夫

千五百米	星 正夫
全	星 正富
五千米	渡邊 徳之
全	齋藤 一
砲丸投	丸山 兼平
全	鈴木 左中
走高跳	安齋 正五
全	大橋 毅
走巾跳	鈴木 久榮
全	澁谷猪之吉
三段跳	大橋 仁
全	菅野 条八

芳賀金之助氏

東白川郡 鮫川村

摸範村たるべく努力さるゝ

東白川郡鮫川村々長芳賀金之助氏は縣下有数の山間村にあつて幾つか地方自治に貢献し地方開發農村振興のために寢食を忘れて努力される温良篤實の士である。氏は村長就任以來農事の改良施設に意をそゝぎ林業、養蠶、畜産等あらゆる産業に方針を立て普通作物に於ては米麥作の經濟的増收に努め煙草及蒟蒻の栽培を普及し桑園の改良を圖ると共に一層夏秋蠶飼育の改善を

なし 林野伐採と人工植栽の均衡を得せし 林相の整備に努めるなど 舉村産業振興の第一線に立ち來たつた今日村勢はとみにあがり近在に範となるべき鮫川村となりつゝある。

之れも氏が村の中心としてなり皆非凡なる手腕を振ひ部下を愛しつゝある信望厚い努力と奮闘の結果にして地方民より慈母の如く敬慕さるゝである。

熱の 人!

齋藤 藤三郎氏

大沼郡 西川村

大沼郡西川村宮ノ下に荒物雜貨商を手廣く營む齋藤藤三郎氏は會津より出で當地に來たりてより幾年かの苦闘を續け他國者として味ふ苦き經驗を踏んできた奮闘努力の人である。

氏は村會に議員たること二期組合會議員を兼ね村政自治に よるところ多く村議中の重として知られてゐる。何事に對して常に熱と力を以つてあたり地方の信用は絶大なるものあり其處に大なる魅力は何人も感ずるのである。兎も角氏は西川村の至寶と云ふても敢て過賞ではないと思ふ。

生けるが儘に

十——×

宗教とは生命を生けるが儘に直感する境地である。信するもの、前には木像はない。生けるが儘の現身があるのみである。これを木像とか或は偶像としか顧みないのは生けるが儘に直感されない物議やのやからである。所謂聰明なる無眼人であらう。奇蹟を見るものは惑ふてゐる。偶像を見るものは死んでゐる。總てを生けるもの、象徴として親しみ得るもの、みが本當に眼ざめてゐる人々である。

×——×

生とは如何なる力であるか。思ふにそれは動く力であり、伸びる力であり、造る力であり、進む力であらう。

人間は物質だけでは生きられない。又思想だけでも生きること出来ぬ。それを素材として生かすのでなくてはならない。それは生命の信であり、宗教が即ちそれである。

×——×

人間として眞の生活とは果たして如何なる生活を云ふのであるか。生活とは單なる存在ではない。ただあると云ふこととは異なるものである。生きて行くことと云ふ事は成長して行くことであり、成長と逆行するものは生きるのではなく死ぬるのである。現在よりもよきものになつて行くこと、これが生きて行くことである。より美しき、より高き、より強き、より大きなものになつて行くこれが本當の生活である。宗教とはこの眞の生活を教示した

ものに外ならない。×——×

労働は生ける姿であり、生ける人間生活の創造の營みである。生きてゐることを恥じない人間が、何故働くことを恥じるのであるか。此々に宗教の必要があるのである。宗教は決して死後の世界のみを暗示するものではなく、現在生ける儘を指示してゐるものである。何にも天上天下唯我獨尊の釋迦が尊いのではない。そう云つたから釋迦が偉いのである。こゝに私は働き甲斐のある人生を感じる。——労働は神聖なり——これ即ち宗教であるからである。

あゝ生けるが儘の働きの如何に力強きよ。宗教は生命であり働くことである。働かぬものに生命はない。勿論宗教もないのである。

磐城片倉製糸株式會社

工場長 辰野賢造
事務長 中村吉郎

鍋屋 號

萬金物 佐藤清四郎商店
相馬郡原町 電話五七番

小名濱町	町長 鈴木 榮	双葉郡廣野村
町長 鈴木 榮	村長 鈴木 忠良	
助役 高木 保	助役 大和田 忠	
収入役 樋口 速	収入役 小磯軍平	